

逆に言えば、我が国の弱点を知らずに江戸は世界一の大都市として我国を警戒しているものと思われれます。だから、彼には日本近海に長く滞在するだけで不利になるといふ怯えもありましよう」

「判り申した。では、交渉を大学頭殿にお任せすれば不利な条約を結ばないで済みそうですね」  
林大学頭「私にお任せを」

こうして第一の問題は解決の目処が立った。そして、列強の経済力についての教えを乞う質問が出る。

阿部伊勢守「それから以前にお尋ねした西欧列強の戦費についてだが、何か判り申したか？彼等西欧、特にイギリスは金の生る木を持つておるのか？」

「金の生る木。おとぎ話のような理不尽な質問なので、答えを期待もせず阿部が尋ねる。」

大学頭「一瞬間を置いて解答した。」

林大学頭「ハッ、その通り彼等は打出の小槌を持つておりまする」

老中達の眼は点になり、信じられないと顔を見合わす。

「大学頭殿、負かした国の財宝を奪ってくるというのではない、金の生る木。じゃ。手品やマヤカシではないぞ。本当なのか」

怒りの表情を浮かべる老中もいる。

林大学頭「ではご説明しますが、これは馴染みの薄い考えですので、理解しにくいと思いますが、何卒ご容赦ください。これから、彼等の鍊金術をご説明させて頂きます」

林復斎は感情を交えずに落ち着いて貨幣の事を話し出した。

「我国の貨幣は、元々米本位制で米一石を単位として他の物と交換いたします。この物々交換に近い流通が行なわれてきました。それでは不便として一石を金貨の一両小判に置き換えて貨幣経済は発達してまいります。だから貨幣の供給量は金などの貴金属の産出量で限界があります。これが限界のある物質貨幣論です。ところがイギリスは限りのない信用を貨幣にしました。判り易く言えば、借用証書が貨幣になるといふ事です。また、イギリスは貴金属が神国日本の様にそれほど豊富ではありません。だから、際限なく作れる紙を貨幣いたしました」

尚、日本は火山国で、貴金属の産出が多い。

林大学頭「そしてその価値を保証する裏打ちが、我が国は有限の貴金属の金等ですが、イギリスは無限になる信用という裏打ちをして貨幣の価値を保ちました」

「そんな事が出来るのか。紙はただの紙ではないか」

「だから、大切な借用証書と引き換えなのです。その上、紙幣には政府の印が押され、偽造すれば大きな罪になります。そうする事で貨幣の価値を保っております。繰り返しになりますが、貨幣の価値の裏打ちに借用証書という信用がおかれます。これはご存知の様に何時何時までに返すから金を発行してくれ（貸してくれ）という証文です。そして最も高い信用を持つ借用証書が国の借用証書、イギリス国債となります」

「国民は法を守っておるから、貨幣の価値は保たれているのですね。では、我が国も制度を変えて紙の貨幣を用いるとしたら、紙の貨幣なら幕府が必要になればドンドン刷ればいいとなるのだが、そうすれば幕府の財政は豊かになるのではないか」

林大学頭「そうではありません。以前に我国では幕府の財政が悪化して貨幣を増やす目的で、市中から貨幣を引き上げ金の含有量を薄めて小判を沢山作りました」

これは小判の改鑄と呼ばれ、例えば金一両を市中から引きあげてそれを薄めて二両に作り替える事である。

「そうじゃ。すると物価が上がって大変な事となった。」

林大学頭「貨幣は増えたのだが、米一石を一両小判としたのに米は増えていないものだから、小判の価値は半減し物価高となりました。ここで物価上昇の原因は、米等の生産物が貨幣の増加より少ない事だという事が判ります。だから、生産力が上がれば物価は下がります。金で買う生産物が多ければ、それだけ物価が下がるのは納得して頂けると思います」

「それでは、際限のない信用を貨幣にしたイギリスはとてつもない物価の上昇を避けて、どの様にして打出の小槌を使っているのか教えて頂きたい」

林大学頭「それは、最初に打出の小槌で作り出した貨幣を生産が伸びる所へ投入します。これは資本主義

と呼ばれますが、イギリスはこの頃、産業革命で途方もなく生産力が向上していました。黒船にも用いられている蒸気機関が産業革命の代表ですが、蒸気機関には人や馬の様に疲れはありません。大きな力をドンドン出します。これで農作物や魚介類・衣服や家の木材そして交通手段・燃料等を人力だけで作るのとは比較にならない程大量に出来る様になりました。これが物価を下げる力となり、大量の貨幣発行とのつり合い（バランス）が取れている為に人々は物価高に苦しまなくても済みます」

まだ呑み込めない老中は目を白黒させているが、錬金術の仕組みは説明されていく。

「大学頭殿、米や金銀が金になるといふのはわかるが、信用が金になるとはどういう事じゃ。実感できない。判り易く教えてくれぬか」

林大学頭「では、我が国にも一部信用で出来ている貨幣を使っている例でお示しいたします。ここに一両金貨（小判）があります。これを4分の1にしたものが一分金貨です。一分とは一両の4分の1です」

ここは4進法である。  
老中達も縦に首を振って頷く。

「ただ、市中では同様にして一分銀貨も使われております。一分銀貨なので四枚で一両金貨に交換できますが、ただし、その一分銀貨の本来の価値は金で出来た一両小判では十二枚必要となります。つまり、一分銀貨は一分金貨の三分の一しか価値がありません。そこで同じに使える様に幕府は銀貨に印を押して同じ様に使えている状況にいたしました。これが、我が国で信用が貨幣として使えるということになります。皆様も意識せずに一分金貨と同様に一分銀貨を使われている事と存じます」

老中達は感心して聞き入っている。

林大学頭「こうして価値の低下がない大量の紙幣が発行され、戦費に充てられていきました。これがイギリスの持つ金の生る木（錬金術）です」

聞き終えた伊勢守（阿部正弘）以下の老中達は、軍事力や科学力だけでなく、日本とはあまりにも懸け離れた西欧列強の経済力を垣間見て、どんな事があっても戦争はならないと腹を決めた。